



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1937, 27(2): 156-158

ISSUE DATE:

1937-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184650>

RIGHT:

黑板博士指導の下に立つ日本古文化研究所の最近に於ける最大の收穫とみるべきは大利藤原宮址の發掘と其復原に關する努力であるが、本書は其第一回の報告であつて第一に藤原宮の造營と沿革、第二に文獻上から見た藤原京の規模を論じ第二編に傳説地たる鴨公村高殿の位置を明にし、最近の發掘と其經過を明にしたもので、極めて多數の古瓦其他の出土品について詳細な報告がのせてある。主として足立康氏と岸熊吉氏の努力である。我等はかうした資料によつて奈良平城宮以前の宮址が漸く世に知られんとすることを喜び、兩先生の努力に感謝する。(藤田)

○鮮滿動植物通鑑

村田戀麿著 目白書院發行
定價二十圓

菊版八百頁の大冊ではあるが定價二十圓といふのは思ひ切つた値段である、本書はその名の示めす通り鮮滿のあらゆる動物と盛京通志や吉林通志以下鮮滿の典籍にあるすべての資料を訪採したもので誠に珍らしくもあり、面白有益な好著である。筆者は卷末の朝鮮料理の一章をみて教へられたのを感謝するが、滿洲あたりの動物でも讀んで行くうちに、あゝさうであつたかと思はるゝものが甚だ多い。朝鮮名と支那名と倭名との對譯があるのが、何といつても本書の特徴であらう。(藤田)

○中國經營西域史

曾問 吾著 商務印書館發行
定價二元五角

支那の參謀本部邊務研究所の所員曾問吾氏の近著である。兩漢の西域經營から魏晉隋の經營をのべ唐朝之經營にわたり五代宋をへて蒙古西征の偉蹟に及び、明清をへて回疆の亂に至り新疆省と外國の關係を論じて上編を終り、下編に新疆統一と其憂患及びロシアとの交渉を明にしたもので一片憂國の熱情の發揚された快著である、最後の地誌篇は參考するに足れると思ふ。(藤田)

○廣東省明細新地圖

葛煥編繪 開明書店印行
定價四角

支那で出来る簡單な一枚刷の省の地圖が近頃は直ちに我國の漢籍書肆の店頭にさらされるやうになつた、本圖のごとき其一例である。勿論精密を極めた地圖ではないけれども新しい交通路や自動車路や縣町村名など可なり詳かにすることが出来る、かうしたのも、見るに従つて採收されんことをすゝめたいと思ふ。(藤田)

雜報

○セイロン島の觀光

面積二萬四千七百平方哩、臺灣より少しく大きい、西曆紀元後屢タミール人の襲來をうけ折角紀前の文化地域も散々に荒されたが一五一七年ポルトガル人に海岸を占められ一六五六年にオランダに支配され、一七九六年には英領になつた。葡萄牙の時代には王朝はあつたが一

八一五年對英抗爭に破れてから國王は國外に放逐されてしまつた、シンハリ王朝の斷絶である。爾後英國の總督が出來、印度とは行政區を別にしてゐる、故に英領印度ではない。コロンボを首府とし全國を十省に分ち各省に理事一名、副理事二名、其下に縣長郡長村長に當る役人がゐる、市はコロンボとキャンディで市長がある。又ステートカウンシルといふ議會がある、議員は五十名で普選である。

人口は凡そ五百三十萬、人種はシンハリズ七〇％で、外にタミール、ムーア、バーガー及び歐羅巴人である。宗教は小乗佛教が優勢でヒンズー、回教、キリスト教これにつぐ。農業では米や穀物が出來るが、食量に不足して米は年々輸入五千萬ルービーに達する、茶は印度について多量に産しゴムの栽培も廣く共に世界の主産地となつた、椰子は全島千五百呎以下の平地に出來て國人の主要生活資源である、加々阿、桂樹、檳榔、烟草の産も少くはない。

工業は不振でマツチ、石鹼の製造位にすぎない、鐵産に黑鉛(日本へ輸出)と寶石がある貿易は四億八千萬留比で、一九二六年頃に比べて二分一に減じてゐる。

セイロンは風光明媚で市街は美はしく古都アヌラドプーラ及びポロンナルワには結構壯大なる遺蹟があるアダムス峯は靈山として名高く、キャンディには佛陀の齒を祀る寺がある、文化は非常に進んだものと全く低級なものとの對立した土地であつて其觀光地は、第一はコロンボ人口三十五萬、市外にマ

ウント・ヴィニアといふ海岸の丘陵地がある、ウエルワツタ動物園、ケラコ佛寺の名所がある。

キャンディには邦人熟知の寺がある、過去二百年の王城で本島第一の仙境、山間盆地の湖畔に位しペラテニヤ植物園が名高い、毎年八月にはアラヘラといふ盆のお祭があつて賑ふ、毎夜象の行列あり盛んなる時は二百頭の象が出る。

古倫母の北二十四哩にネコムボ、南の方七十二哩にゴールの海岸都市がある、椰子林の間のドライブに適する。海拔六千二百四十呎の高地にニユーレリヤの避暑地がある。パンダラウエラも其附近の避暑地である。アタラダプーラは紀元前四三七年から紀元一〇九年前迄の舊王都で嘗ては十六平方哩の廣大な王城であつた、紀元前三百七十年にチツサ王の建てたタバコ(ピルマでバゴダといふ)といふ圓塔數基あり、つい最近までは森林にかくれてゐた山であつたが、木を切つてはじめて宏壯なバゴダを發見した位で、今後如何なものが森の中から出るかわからぬといはれる程の廣い古い都である。

コロンボから海岸を走つてゆく間にはジャングルも多い、野獸怪鳥棲息の森林であつて夜間は恐ろしい所もあるが、乾燥地帯であるから、甚だしい陰氣はない。其他ミヒンターレ、ポロンナルワ、シギリヤ、タムブルラ等の名勝がある、トリコンマリは三方山に圍まれ底知れぬ深海をもつ良港で東印度艦隊の根據地である、最近は盛に軍事設備をやつてゐるやうである。

セイロン在留邦人は約五十人、殆ど古倫母に居て最古の老舗はミカド(三門商會)で、明治四十二年徒手空拳でやつてきた沼野英一君の成功である、其他鹽車喜市、大野磯一、巻口利民、小野豐明氏等はいづれも一騎當千の日本商人である。

○古北口關門 (圖版第二版説明)

玉門陽關から蜿蜒として東は山海關、さらに東して遼東に達する萬里長城には、至る所に關門がある、さうして關門の内外には漢民と蒙古人又は滿洲人との貿易市場が出来た、たとへば撫順のごとき、張家口のごとき、山海關のごとき皆その好例である。

北京から熱河への公道には古北口がある。これは北支の大平野から内蒙古への最も重要な關門であるが圖版の寫眞其一是古北口市街の北門から見た釣魚臺で、中央に絶崖に倚る望樓がある。即ち釣魚臺又は親子望樓で潮河の河原を扼する北門(古北口正關)に對峙する所の要塞である。萬里長城はこれより西に走つて萬壽山(左方)から臥虎山(右の方の山)へ谷に渡り峯をよぢる。

寫眞其二は所謂古北口の北關(南門)で兩岸壁立中有路僅かに一車を容るにすぎない、一夫險を守れば萬夫もすぐるなしといはれる天險である。内蒙古に歸つてゆく駱駝の背上にはメリケン粉が山とつまれてゆく、朔風切々として千年の山河依然たりともいふべきであらう。

寫眞其三は古北口の東關で、北側の古北口城壁である。この關の城壁の右側が内側で壁下に入母屋瓦葺の殿堂風の建物があり楊樹の下に無心の支那人がたつてゐる。

高地の上の四角なものは望樓であり烽火臺である。この望樓は恰も東關外口を扼する陣地をしめる。萬里長城の周縁には至る所にこの烽火臺があつて、一たび外兵がくるとこの烽火の信號は昔は漢の長安の甘泉殿に通じ後は北京城の景山に聯絡されてゐたものである。

今し冬の景色ではあるが、この地の夏は更らに美はしい風景をしめすのである。

寫眞説明は天津日本高等女學校教諭小林伍一郎氏の報告による。